

日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室気付

Tel. 0234-41-1288 ☎ : info@jsswe.org

<http://jsswe.org/>

2022 年 1 月 7 日 発行

目次

1. 巻頭言	1
コロナ禍を経て学びの蓄積を（日本社会福祉教育学会 副会長 小山 隆）	
2. 第17回大会報告	2
2021年6月19～20日 大会プログラム	2
□■□参加者の声から□■□	3
3. 総会	7
4. 福祉実践報告	8
5. お知らせ	9
6. 編集後記	9

1. 巻頭言

コロナ禍を経て学びの蓄積を

小山隆（同志社大学）

世界の状況を見た時まだまだ予断を許さないものの、コロナ感染状況は日本においてやや落ち着いてきたようにも見える。（もちろん将来についてまだまだ余談は許さないが。）振り返れば、筆者の勤める大学でも2020年度の春学期は完全に対面授業が中止され、少人数のゼミさえもオンラインを余儀なくされた。さらには大学の敷地内に入構するにも学生証と記名が必要となる時期があった。その後原則対面授業の基本方針が打ち出され可能な限りその実現が目指されているが、現実には前列横列を開けるいわゆるコロナ定員（本来席数の3分の1）のため、約100名を超える授業はオンラインにせざるを得ない現実が2年目を終えようとしている現在も続いている。そのため大規模授業は軒並みオンライン講義となり、教養系の科目や法経商などの大規模学部への影響は大きい。また対応は大学において様々ではあるが「ソーシャルワーク実習」が実施できずにオンライン対応を行うこととなった例も見られる。

しかし、福祉教育にとって危機的とも言えるこの状況を「空白の2年間」として総括するわけにはいかないだろう。すでに各所で総括は行われ始めているが(※)、本学会ではさらに一歩進めて「先駆的实践から学ぶ」段階から、「メンバー一人一人が発信し」学びを集積していく作業へと歩を進めていきたいと思う。

ここでは、自らのオンライン講義体験を語ることで議論のきっかけとしての自己開示とした。(※※)

従来、半年2コマ連続4単位で実施している科目(本学で言うソーシャルワーク論Ⅰ)である。履修者は100名前後である。

これをオンディマンドとリアルタイムに分割した。具体的には1コマをオンディマンド講義(VIMEOを利用)として録画配信し、出席を兼ねたレスポンスシートの提出を3日以内に求めた。そして翌週1コマ枠をオンラインリアルタイム授業(ZOOMを利用)にあて、録画への学生からのレスポンスに対する応答を60分おこなった。その上でブレイクアウト機能を用いて4-5人のグループを作り、小山の発言への疑問や各グループで自由に話題を出し話し合い、さらに残された15分を全体クラスへのフィードバックの時間に充てた。

対面でも100名クラスでのグループディスカッションは一部導入していたが、とても毎回困難であった。また親しい者同士が固まりグループでの学びを深める作業は容易ではなかった。

それが録画の繰り返し視聴を可能にし、しかも異なるメンバーとのグループディスカッションを毎回保証することができたことは講師である筆者にとっては満足度の高いものであった。来年度に本来の対面講義に戻ったとき、どのような形でオンラインで確保できたメリットを維持できるか悩んでいるような状態である。

もちろん画面オフにする者が多く学生の反応がわかりにくい等欠点も多い。また授業後の質問の場といった非構造的な空間の作りにくさもある。

しかしそれでもコロナ期に得た経験・工夫を今後に生かしたいとも思うのである。

※例えば今年度の本学会年次大会のメインテーマは「社会福祉分野におけるICT活用教育の課題と展望ーウィズ/アフターコロナ時代の社会福祉教育を考えるー」であった。

※※もちろんこのような整理はすでに各人各所で行われている。ただ今回の体験はおよそ福祉関係者、福祉教育関係者すべてがくぐり抜けている。その意味では過去の大震災などと比べても「経験者から学ぶ」姿勢よりは、自らが「発信者としてコミットしていく」ことが求められるだろう。

2. 第17回大会報告

去る2021年6月19日(土)、20日(日)に、テーマを「社会福祉分野におけるICT活用教育の課題と展望ーウィズ/アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える」として、オンラインにて開催されました。

コロナ禍の中、全国の社会福祉教育の現場が遭遇したICT活用教育のあり方について検討しました。また、どのようにして経験したことを今後のICT活用教育に生かすのか、その課題は何であるのかについて参加者の皆様とともに検討する機会となりました。

限られた時間ではありましたが、ご参加いただいた皆様とともに、コロナ禍の中、ICTを活用しながら社会福祉教育を考える場となりました。

お忙しい中、ご参加くださった皆様には厚く御礼申し上げます。



【大会プログラム】

■ 1日目(6月19日)

13:00	開会式
13:00~14:30	基調講演 「コロナ禍を経験してのニューノーマルなオンライン教育の可能性」 講師：山田 礼子(同志社大学 社会学部 教授、大学教育学会 学会長)
14:45~17:15	学会企画シンポジウム A テーマ「福祉専門職養成におけるICT活用教育の課題」

	シンポジスト 池田 雅子（北星学園大学社会福祉学部 教授） 保正 友子（日本福祉大学社会福祉学部 教授） 佐藤 貴之（北九州市立大学基盤教育センター及び地域創生学群 教授） コーディネーター 白川 充（仙台白百合女子大学人間学部 教授）
--	---

■ 2日目（6月20日）

9:30~12:00	学会企画シンポジウム B テーマ「障害を持つ学生に対する ICT 教育の現状と課題」 シンポジスト 大友 秀治（北星学園大学社会福祉学部福祉臨床学科准教授） 瀧本 美子（龍谷大学障がい学生支援室支援コーディネーター） 大村 美保（PHED（障害と高等教育に関するプラットフォーム）SIG-CSW（キャンパスソーシャルワーク専門部会）メンバー、筑波大学人間系障害科学域助教） コーディネーター 阪口 春彦（龍谷大学短期大学部 教授）
12:20~13:00	学会総会
13:00~15:00	自由研究報告

□ ■ □参加者の声から □ ■ □

第 17 回大会に参加して

小川 智子（城西国際大学）

6月19日（土）～20日（日）に行われた、第17回大会「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望ーウィズ/アフターコロナ時代の社会福祉教育を考えるー」に参加させていただいた。2020年度からコロナ禍の中で、試行錯誤しながらオンライン教育に取り組んできた私にとって、基調講演、2つの学会企画シンポジウム、自由研究発表に参加し、教員側の視点と共に学生の視点から、社会福祉分野における ICT 活用教育の効果と課題について考える貴重な機会となった。



👉 基調講演
講師 山田礼子先生（同志社大学）

基調講演では、同志社大学の山田礼子先生から「コロナ禍を経験してのニューノーマルなオンライン教育の可能性」というテーマで講演が行われた。コロナ禍の中で、グローバルコンピテンスを習得するという目標に沿った、同大学の海外協働体制授業の事例が紹介された。社会福祉教育においてもコンピテンスベースの教育が求められており、その実践成果と課題から多くの示唆が与えられた。

1日目、学会企画シンポジウム A「福祉専門職養成における ICT 教育の課題」では、教育工学と福祉専門職養成の視点から、3名のシンポジストの先生方の教育実践のお話を興味深く聞かせていただいた。特に、講義ー演習ー実習教育の循環を促進する上で、どの部分に ICT 教育を活用することが効果的で、どの部分を対面授業で展開することが必要なのか、この両側面の活用を考えることが重要であると感じた。また、2日目の学会企画シンポジウム B「障害を持つ学生に対する ICT 教育の現状と課題」では、ICT 教育を受ける学生が、孤立した状況に追い込まれ、悩み、苦しみながらこのコロナ禍の教育を受けてきたことを改めて認識した。そのような中で、支援体制を組織として構築していくことの意義を強く感じた。これら2つの学会企画シンポジウムでは、



👉 コーディネーター
白川充副会長（仙台白百合女子大学）

シンポジストの先生方のお話、参加者の皆さんの議論を通して、現在も続くコロナ禍の教育に取り組む工夫の視点とエネルギーをいただいた。

大会全体を通して ICT 教育と社会福祉教育のあり方の本質について考え、社会福祉教育について教育学の視点から考える内容が複数あり、日本社会福祉教育学会に所属する学会の会員として、今後の社会福祉教育を考えるための種を与えていただいた。最後に、このような意義のある大会の準備と運営をしてくださった学会関係者の皆さまに厚くお礼を申し上げたい。

大会企画シンポジウムに参加して

孫希叔（梶山女学園大学）

2020年、世界は、新型コロナウイルス感染症の影響によって誰も予想できなかった未曾有の事態に陥った。今もなお続いている感染拡大は、大きな社会変動のうねりとなり、これまで当たり前のように行われていた専門職養成教育のあり方にまで変容をもたらした。



シンポジスト
相談援助実習代替プログラムにおける ICT 活用の試みについて話をする
池田雅子会員（北星学園大学）

この時期、実践現場から教育の場へと身の置き場を移した私は、教えるという営みにおいて自分らしい授業を磨くことに加え、コロナ禍への対応に追われる、落ち着きのない日々を過ごした。そんな中、目に入った本大会のテーマは、これからの方向性をいかに捉えればよいかを考えるうえでヒントとなると思い、参加した。

シンポジウムでは、コロナ禍を契機とした ICT 活用の課題と可能性について、3つの報告が行われた。保正氏は、養成教育に ICT を取り入れたことで、学び側の「授業時間の柔軟性」や「集中した授業環境の確保」等が実現できたとしながら、一方では「臨場感の欠如」等の解消が求められる

るとし、ICT を用いた効果的な福祉教育のあり方や教授法に関する議論の必要性を指摘した。

池田氏は、「相談援助実習代替プログラム」における「講義—演習—実習」の連続性が、学生同士の思考やコミュニケーションを触発させ、学びの共有がさらなる学びやつながりを生み出すことに注目し、代替授業での学びやコミュニケーションの促進を促すツールとして、ICT 活用の意義を指摘した。佐藤氏は、教育工学領域での知見から、ICT の福祉専門職養成教育への取り入れ方について「同じ形ではなく同じ価値を追求する」ことに軸をおき、柔軟性を発揮しながら「平時に戻っても使える ICT 教育の要素を探す」ことで、With/After コロナを見据えた教育活動が可能となり、対面に劣らない質の充実化が期待できると指摘した。



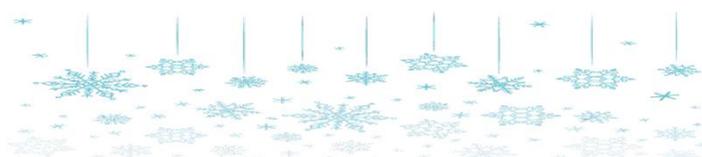
シンポジスト
ICT を使用したソーシャルワーク教育の現状と課題について話をする
保正友子会員（日本福祉大学）

これらの報告はいずれも、福祉専門職養成教育における ICT 活用の取り組みが、多様で柔軟な教育機会の提供を可能にし、質の高い学びに資するものであることを示唆していた。たしかに、ICT の進歩がもたらした自由な学び方は、いつでもどこでも都合の良いときに学ぶことを可能にした。しかし、一見スマートに見える学び方の裏には、授業運営の違いや学生の学習姿勢



シンポジスト
福祉工学のお立場から「福祉専門職養成における ICT 活用教育の課題について話をする
佐藤貴之先生（北九州市立大学基盤教育センター及び地域創生学群）

勢といった側面と、専門職養成に求められる「学」と「術」を組み合わせ、教育の質を追求するといった本質的な部分での「二極化」が拡大する可能性がある。こうした危惧は、ICT 活用によって表面化され、今後検討していかなければならない課題の重要性を裏付け、学会レベルで福祉専門職養成教育の更なる高度化に向けた取り組みの必然性を改めて示唆していると考えられる。私



もこれを機に、学生の成長をいかにとらえ、福祉専門職としての土台をいかに構築してもらえるのかを模索し続け、学会等で共有していきたい。

初めて日本社会福祉教育学会大会に参加して

鬼頭 裕美（松山大学）

第17回大会テーマは「社会福祉分野におけるICT活用教育の課題と展望ーウィズ/アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える」。第2日目後半からの参加となったが、全ての内容が日頃の教育実践と関連しており、教員4年目の筆者にとって大変有意義な学びの機会となった。昨年度のスタートは、緊急事態宣言による突然の大学入構禁止と、遠隔授業の開始で混乱を極めていたが、Web会議システムやクラウドの便利さにはあっという間に慣れ、対面授業となった現在でも大いに活用している。教育におけるICT活用のメリットと対面交流の必要性を強く実感した1年となり、今後も知見を深めていきたい。



自由研究発表 座長
川嶋恵美会員（関西学院大学）

2日目の学会企画シンポジウム「障害を持つ学生に対するICT教育の現状と課題」では、具体的なICTツールやその活用方法についてご紹介頂いた。すでに小学校でもICT活用によるインクルーシブ教育はスタートしている。ICTは障がいのある学生が修学の権利を行使するための一つの選択肢であり、重要なのは学生との対話や学生の自己決定の尊重である、という学びを肝に銘じたい。その点で「キャンパスソーシャル

ワーク」の視点は有用だが、同時に、大学教育のハード・ソフト両面でのユニバーサルデザイン化、若年層への地域資源開発などの課題も感じる内容であった。

自由研究発表では、川嶋恵美先生（関西学院大学）座長のもと、Virág Viktor先生（長崎国際大学）からグローバル化社会におけるソーシャルワーク教育の動向の国際比較について、小川智子先生（城西国際大学）から「演習」担当教員に求められる役割についての発表を拝聴した。この10年間のグローバル化による変化は、日常生活でもリアルに感じられる。しかしながら、日本（IASSW加盟校）ではグローバル化によるソーシャルワーク教育の変化を実感している割合が低く、グローバル化関連科目（特に必修科目）の設置が少ない、と問題提起された。筆者の所属機関にも多文化ソーシャルワークなどの科目はなく、昨年は外国人相談員の方にゲストスピーカーを依頼した。その際「社会福祉士って初めて知りました」と言われ、ショックを受けた。SDGsやCSRの推進もあり、企業も地域もこぞって社会課題の解決や多様性の尊重に関心を示すなか、社会福祉士が役割を果たせていない領域があり、取り残されている人々が存在することに強い危機感を抱く。「演習」担当教員の役割を踏まえ、地域を基盤としたソーシャルワークにおいて、社会変革と社会的包摂の実現を目指す「協働」のなかで、社会福祉士が力を発揮でき、存在価値を認められるように今後精進したい。



自由研究発表者
「グローバル化とソーシャルワーク教育に関する国際研究 ～国内外動向の比較～」
Virág Viktor 会員（長崎国際大学）



自由研究発表者
「科目『演習』担当教員に求められる役割に関する研究 -社会福祉士養成のあり方の議論内容に焦点をあてて-」
小川 智子会員（城西国際大学）

今回、オンラインだからこそ地方在住・子育て中の筆者でも参加が叶った。先の見通しが立たないなか、準備と運営を下さった事務局や実行委員会の先生方に深く感謝を申し上げたい。次回は、ぜひ全日程で参加させて頂きたいと考えている。

「障害を持つ学生に対する ICT 教育の現状と課題」を振り返る

阪口 春彦（龍谷大学短期大学部）



👉コーディネーター
阪口春彦会員（龍谷大学短期大学部）

2021年6月19日、20日に開催された日本社会福祉教育学会第17回大会の企画を検討する委員会の委員であったことから、二日目の学会企画シンポジウムBの企画を担当することになり、コーディネーターも務めさせていただくことになりました。

第17回大会全体のテーマは「社会福祉分野におけるICT活用教育の課題と展望—ウィズ/アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える—」で、この全体テーマを深めることができるシンポジウムのテーマを検討しました。

この1年数カ月の間、コロナ以前とは比べ物にならないほど積極的にICT教育を導入しなければならず、社会福祉教育に携わる者は、新しい知識やスキルが求められ、悪戦苦闘しています。このような状況下では、特別な配慮が必要な学生に対する教育が後回しにされがちなのではないかという問題意識があり、「誰一人として取り残さない」という視点は重要であると考えました。そこで、障害を持つ学生に対するICT教育に焦点を当て、「障害を持つ学生に対するICT教育の現状と課題」を本シンポジウムのテーマとすることとしました。

本シンポジウムでは、3名のシンポジストをお迎えしました。

北星学園大学の太友秀治氏には、「障がいや生きづらさを抱える学生へのICT教育に関する課題」というテーマで、ご自身の教育実践を踏まえてご発題いただきました。

龍谷大学障がい学生支援室で支援コーディネーターをされている瀧本美子氏には、「オンライン教育普及に伴う



👉シンポジスト
障がいや生きづらさを抱える学生へのICT教育に関する課題について話をする太友秀治先生（北星学園大学）

課題を抱える学生への配慮を踏まえた教育のあり方について」というテーマで、これまでの支援活動を踏まえご発題いただきました。

筑波大学の太村美保氏には、「ICTを活用した障害のある学生に対する修学支援」というテーマでご発題いただきました。太村氏は、東京大学のPHED（障害と高等教育に関するプラットフォーム）SIG-CSW（キャンパスソーシャルワーク専門部会）のメンバーでもいらっしゃるのので、キャンパスソーシャルワークについてもご説明いただきました。

シンポジストからのご発題や質疑応答をとおして、ICT教育が推し進められる中で生じている新たな支援ニーズ、ICT活用の有効性、障害特性に応じた学生一人一人に対するICTの活用等による修学支援の必要性などについての

認識を深めることができ、学生一人一人にしっかりと向き合うとともに、太村氏が所属されているPHEDのウェブサイトなどをとおして情報をアップデートしていく必要性を感じました。

また、障害そのものだけではなく家族関係や経済状況による就学への影響についての理解、アウトリーチなどによる潜在的なニーズの把握、ピアサポート体制や学内外の協働体制の構築、居場所づくりの必要性などについての認識も深めることができました。これらの課題に対応するためには、障害特性に応じた個別的な修学支援だけではなく、障害を持つ学生の生活全体を支える視点や、メゾ、マクロなソーシャル・ワークという視点も重要であり、キャンパスソーシャルワークの考え方や実践が普及する必要性を共有することができたのではないかと考えています。



👉シンポジスト
オンライン教育普及に伴う課題を抱える学生への配慮を踏まえた教育のあり方について話をする瀧本美子先生（龍谷大学障がい学生支援室）

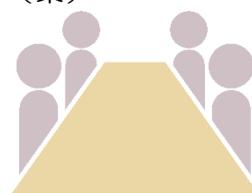


👉シンポジスト
ICTを活用した障害のある学生に対する修学支援について話をする太村美保先生（筑波大学）

3. 総会報告～日本社会福祉教育学会 2021 年度総会～

第 17 回大会開催期間中の 2021 年 6 月 20 日（日）12:20～13:00 に、オンライン会場（zoom）において 2021 年度日本社会福祉教育学会総会が開催され、13 名の会員より参加がありました。志水会長の挨拶の後、以下の議題について議事を行い全て承認されました。

1. 第 1 号議案 2020 年度 事業報告（案）
2. 第 2 号議案 2020 年度 決算報告（案）および監査報告
3. 第 3 号議案 2021 年度 事業実施中間報告 兼 補正事業計画・予算（案）
4. 第 4 号議案 2022 年度 事業計画（案）
5. 第 5 号議案 2022 年度 予算（案）
6. 報告事項 名誉会員の推挙について



《議事録》

（1）第 1 号議案 2020 年度事業報告（案）について

小関事務局長から、①理事会・事務局関係、②研究関連、③学会誌、④ニュースレター、⑤渉外関連について説明があった。質問は無く、賛成多数で承認された。

（2）第 2 号議案 2020 年度決算報告（案）および監査報告について

小関事務局長から、2020 年度決算報告（案）について説明があった。その後、笛木監事・福山監事から提出された監査報告書が読み上げられ、「事業は適切に実施され、会計収支決算についても適切に遂行されている」ことが確認された。小山副会長から「会費納入率を上げるための対策を検討すべきである」との意見があり、質問は無く賛成多数で承認された。

（3）第 3 号議案 2021 年度事業実施中間報告兼補正事業計画・予算（案）について

小関事務局長から、①理事会・事務局関係、②研究関連、③学会誌、④ニュースレター、⑤渉外関連について説明があった。学会誌の発行が 2 回、NL の発行が 3 回となることなどが報告され、それらの実行に伴う「2021 年度補正予算（案）」が提示された。志水会長から「予備費 40 万円を原資とするプロジェクト研究を学会として立ち上げたい。については、会員に呼びかけてワーキンググループを組織したい。」との提案があり、2021 年度は予備費を充てること、2022 年度は予備費ではなく正式に事業化することを念頭に三役会議で検討した後、理事会へ諮り、次回総会に上程することとなった。質問は無く、賛成多数で承認された。

（4）第 4 号議案 2022 年度事業計画（案）について

小関事務局長から、①理事会・事務局関係、②研究関連、③学会誌、④ニュースレター、⑤渉外関連について説明があった。②研究関連では、第 18 回大会を中国四国大会とする予定であることの報告があわせてなされた。会員数の拡大方法についての質問があり、志水会長から「学会の露出度を増やすことで対応したい」との回答があった。また「学会誌および NL の発行回数は適切か」との質問については、志水会長から「NL については発行体制を見直した。学会誌については、会員から投稿があることが必要ではあるが、予定通りに発行できていないため、魅力づくりに力を入れたい」との回答があった。議案については賛成多数で承認された。

（5）第 5 号議案 2022 年度予算（案）について

小関事務局長から、「2022 年度予算（案）」について説明があった。議案については賛成多数で承認された。

（6）報告事項 名誉会員の推挙について

小関事務局長から「名誉会員推挙規定」にもとづき、笛木俊一会員（日本福祉大学名誉教授、日本社会福祉教育学会第 4 期及び 5 期監事）の名誉会員への推挙が 2021 年度第 1 回理事会（6 月 13 日開催）において決議された旨の報告があった。また、志水会長から笛木名誉会員のコメントを NL で紹介する対応とする旨、補足があった。

4. 福祉実践報告

36号のニュースレターに、イベントの掲載情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトの情報を募集しました。今回はコロナ禍の多忙さ故か応募が無かったため、一例として編集委員による社会福祉を学ぶ学生と地域活動をお伝えします。勿論、今後もこのような情報に関しては募集を継続いたします。どうか、学会事務局ニュースレター担当 (nl.jsswe@gmail.com) まで振るって応募ください。

コロナ禍の地域活動

西川 ハンナ(創価大学)



八王子市にある創価大学文学部に所属する私のゼミ(以下西川ゼミ)は、昨年度より八王子駅前北口商店会のオフィシャル・サポーターズとして様々な活動を行っています。イベントの福引き、七夕まつりの短冊飾り、秋の古本祭りへの出店などを数年参加してきた関係でこの名称を頂きました。高齢化の真っ只中の、商店会の皆様と共にまちなか活動をする

ことは、地域や地域住民、文化や歴史を学ぶ機会になります。しかし、コロナ禍の授業はリモートになって全国各地から授業を受ける日々が続きました。そんな中で商店会長から「八王子駅前北口商店会ブログ」の執筆を依頼されました。ある学生は長崎から八王子を想い、ネットでニュースを探してはお題を見つけブログを書き続けました。「パン屋めぐり」の記事などは遠方の学生が記事を書き、実際の写真は八王子周辺に住む学生が直接店舗に足を運び、写真を撮りブログに掲載しました。学生もまたそれぞれ会うこともできない中でブログによって繋がっていくこともありました。八王子七夕まつりは、八王子の風物詩。恒例のイベントも中止になる中で、例年ならば多くの七夕の短冊が飾られるブリッジに、今年も何も無いのは切なすぎると商店会。人の密集を避ける、しかし、何か明るい話題を提供できないかと商店会の方と何度も検討を重ねた結果、ゼミ生の美術部員が織姫と彦星を描き、同じく書道部員が書をしたためました。絹織物で栄えた八王子は「桑都(そうと)」とも呼ばれたことを知った学生が、イラストの中の短冊に「蚕は5頭」と、クイズを忍ばせました。織物の町として栄えた事、蚕は5匹と言わない事、このような知識は街中に出ないと得られません。

コロナ禍でも、地域活動に必要な小さな仕事を担わせていただきながら、街やそこに住む人の暮らしを学んでいます。その中で自分達の活動が地域にとって有益だと知った時、学生は更に自分達に何ができるのか、自分達の行った地域活動がどのように評価されているのか、地域やそこに住む人に関心が広がります。地域の生活課題を広く捉える中で、再び社会福祉の学びに戻ってくるといふ経験も必要なのではないかと考えています。



八王子駅前北口商店会ブログ
<https://kitaguchi802.tamaliver.jp/>



コロナ禍に IOT を活用し、商店会の方たちとやり取りし、七夕祭りに協力しました。

5. お知らせ

ニュースレター第 38 号は トライアルでオンライン配信します！

ニュースレター第 36 号で予告したとおり、次回の第 38 号（2022 年 3 月発行予定）は学会ウェブサイト上でオンライン配信します。これまでの学会情報はあますことなくお伝えし、さらにオンラインの特性を生かしたコンテンツも掲載予定です。それ以降のニュースレターの提供方法は、会員の皆様のご意見・ご感想をもとに検討しますので、忌憚なくお知らせください。



コンテンツ募集中！！

イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトなどのコンテンツも、随時受け付けています。皆様とおきの情報を、事務局 (nl.jsswe@gmail.com) までどしどしお寄せください。

6. 編集後記

明けましておめでとうございます。

昨年も、会員の皆さまからお力添えをいただきながらニュースレターを発行することができました。ありがとうございます。

本年の干支は、「壬寅(みずのえとら)」年です。「壬寅」は、厳しい冬を超えて、芽吹き始め、新しい成長の礎となる年のようです。

この度も、今号の作成にご協力いただいた皆さまに心から感謝しております。

また、やむを得ない事情により、ニュースレター37号発行が遅れ、皆さまにご迷惑をおかけしましたこと、心よりお詫び申し上げます。

今号は、コロナ禍の中での「福祉実践報告」を掲載しております。

「コロナだから〇〇できない。」ではなく、「コロナ禍だからこそ、できること、見えること。」といったように、前向きな気持ちになれる実践報告です。

今号に関しましては、至らない点もあったかと思いますが、最後までお読みいただきありがとうございました。

次号の発行は、3月下旬の予定です。春風とともに、皆さまのお手元へお届けしたいと思います。

本年も、皆さまにとって素晴らしい年となりますことをニュースレター編集委員一同、祈念しております。

今年も、何卒よろしく願いいたします。



(ニュースレター編集委員)